《夏の家　冬の家》計画に関する報告書 **No.3**

草刈りと夜のおしゃべり、テストピースの制作と土が包む時間について

作成者：村上 慧

2022 年 11 月 12 日

(図 30)

はじめに

前回の報告から3ヶ月近く経ってしまい、すっかり秋も深いところまできてしまった。前回は版築（土を押し固める建築の技法）のテストピースを、アトリエ近くの工事現場からもらった土で制作したところで報告が終わっているが、本報告書では主に千葉の現場で 9 月に行った草刈りと、その際に体験した公衆浴場でのおしゃべりと、現場から採取した土を使ったテストピース制作（図 30）についての記述を行う。

その前に、本プロジェクトのタイトルについて

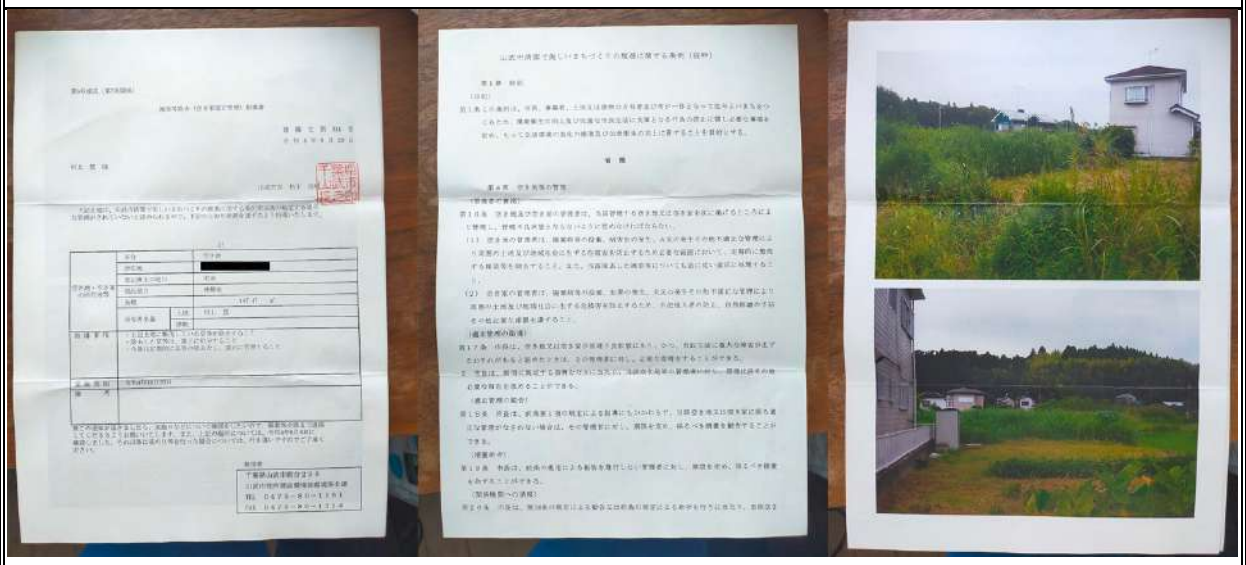
本計画は《夏の家　冬の家》というタイトルを冠しているが、私にはこれがしっくりきていなかった。なぜなら名詞だからである。どうにも、言葉に動きが足りない。本計画は「家」という物体を作ることに主目的があるわけではなく、この報告書の送付を含めて、私が発酵熱や気化熱を用いて住むために調べ、実験し、制作することすべてを含んだ活動である。また私の前作品《移住を生活する》と同じく、住むことのパターンを作るプロジェクトであり、《移住を生活する》も動詞タイトルだった。住むことは常に現在形で起きている。我々は常に住む動物であり、「住まなくなる」ということはありえない。考えてみれば、住むことを意味する「live」と、音楽などで使われる「ライブ」が同じ綴りなのも面白い。なので本計画もなんらかの動詞を冠したいと思い、私はここ数ヶ月でいくつもの候補を捻り出していたのだが、先日とある街の商店街で「勉強堂」という文房具屋を見つけてしまい、電撃が走った。勉強堂。なんていい名前なんだと思った。タイトルは「村上勉強堂」でいこう、と思った。動詞ではないが、この際よしとする。以後本計画を「村上勉強堂」と呼ぶことにする。

《夏の家　冬の家》計画改め《村上勉強堂》計画に関する報告書 **No.3**

草刈りと夜のおしゃべり、テストピースの制作と土が包む時間について

作成者:村上 慧

2022 年 11 月 12 日



(図 31)

草刈りに行く前日、ポストに入っていたもの

9月22日のことだった。7月に土地を購入してから二ヶ月が経っていたが、私はまだ一度も現地に行けていなかった。そろそろ草刈りをしないとまずい、きっと現場は植物で大変なことになっているだろうとは思っていた。そんなころに山武市から封書が届いた(図31)。

「雑草等除去(空き家適正管理)指導書」と題されたその書類は要するに、「雑草がのびているから刈るように」という役所からの通達であった。不動産会社ケンハウジングの安藤さんから「草刈りをさぼっていると市から手紙がくる」と聞いてはいたが、本当に届いたのである。びびった。まさかこんなに早いとは思わなかったのである。書面にはご丁寧に「あなたのところ、こんなに草がのびてますよ」ということがよくわかる、現地の写真まで印刷されている。添付された「山武市清潔で美しいまちづくりの推進に関する条例」の抜粋には、10月20日までに草刈りをしなければ50万円以下の罰金に処すると、物騒なことが書かれていた。

＜突然のコラムコーナー＞

『お金のむこうに人がいる』(田内学著)によると、それまで市民の間ではなんの価値も認められていなかった「貨幣」を市場に流通させるために行われる最も効果的な方法は、「徴税」であると書かれている。「お金というものを作ったからこれを使いなさい」だけでは誰も使わないので、「このお金を稼いで我々に納めないと、牢屋にいれますよ」という暴力をちらつかせることで、貨幣の流通に成功したというのである。私は役所からの書面に、その一端を見た気がした。権力装置とはおそろしいものだと思った。50 万円、土地の値段よりも高いではないかと思った。＜突然のコラムコーナー＞おわり

この案内が届いたら連絡するようにと書かれていたので、私は「山武市役所環境保全課」に電話をした。「忙しいところありがとうございます」と女性の声が丁寧に対応してくれた。書面の内容とは裏腹に、その声の印象は非常にへりくだったものだった。私は「今月中にはぜったいに草刈りに行きます」と約束した。すると相手は申し訳なさそうに「今回だけじゃなくて、あの、定期的にお願いをしたいのですが。条例がありますので…」と言った。私は「こういうのって役所の人がパトロールしてるんですか？」と質問をしてみた。「はい、近隣の方から連絡があれば、見に行っています」とのことであった。要するに通報があったということだ。すこし心配になってしまった。これからも草刈りをさぼったら通報がなされ、この手紙が届くのだろうか。

草刈りと夜のおしゃべり、テストピースの制作と土が包む時間について

作成者:村上 慧

2022 年 11 月 12 日

翌日～翌々日にかけての草刈り

封書が届いた翌23日、車で現地へ向かった。ミッションは草刈りと、版築のテストピース制作のために50センチ以上の深さから採取した土を持って帰ることである。1日では終わらないことを予想して車内で一泊する想定で臨んだ。

＜当日のメモより＞8時台に起きたというのに、2日前に余った味噌汁を冷蔵庫から取り出して火にかけ、冷凍ご飯を解凍し、納豆と味噌汁と白米というお手本のような朝ごはんを食べてから、一斤から一枚分を切り出したきり冷蔵庫に放置してあった食パンを5等分にカットし、1枚ずつジップロックにいれて冷凍し、ぬか床を混ぜて冷蔵庫にいれ、洗いものをして、1泊分の着替えをバッグに入れて、前日に作成しておいた「持っていくものリスト」を見ながら道具を車に突っ込み、ようやく我が土地に向けて出発したときには正午を過ぎていた。首都高には乗らずに幕張のあたりまで行き、久しぶりに聴きたくなった中村一義を流しながら東関東道を駆け抜け、現地に着いたのが三時ごろであった。ここまできて急に焦りはじめた。もう日が暮れるではないかと、慌てて作業の準備をする。草刈りの様子を記録するためGoProを三脚に取りつけ、車の屋根の上にのせてタイムラプスをセットし、マキタの電動草刈り機を肩にかけ、私は草刈りをはじめた。草刈りをするぞと思い始めてからたぶん一ヶ月半くらい経っているが、今日ついに実現したのである。

(図 32)

前回ここにきたときは、ゴジラが襲来したときの東京都民みたいに逃げ惑う虫たちのことを報告したが、あれから二ヶ月が経ち、植物たちは僕の背丈ほどまで伸びていた(図32)。地面などは見えない。草の根元も見えないので、最初はどのように草刈り機をいれたらいいのかわからなかった。地面すれすれに刃をいれたつもりが、ぜんぜん、20センチくらい高いところを刈っていた、ということの繰り返しで、しかしとにかく力任せにざくざくと刈っていった。

草刈りと夜のおしゃべり、テストピースの制作と土が包む時間について

作成者:村上 慧

2022 年 11 月 12 日

マキタの充電式草刈り機はかなり調子がよかった。「女性用」と店頭で説明されたこともあり、それほど重くないので持っていて疲れないし、なにより静かなのがよい。このあたり、家は少ないが住宅地ではあるので、近所の迷惑にならないようひっそりと作業をしたい私にはぴったりだった。切断力も申し分ない。

しかし相手は、おそらく五十年ほど前に宅地開発されたにも関わらず、いまのいままで小屋の一軒すら建つことなく放置された大地に根付いた植物たちのネットワーク(文字通りのネットワーク)である。素手で掴んで一本だけ引き抜こうとしても、まわりの草たちの根が地中でがっちりとスクラムを組んでいるような感じなので周囲数十センチにわたって根こそぎぶっこ抜くほどの気合いがないと歯が立たない。そしてさっきから「草刈り」と書いているのだが、相手にしているのは「草」という言葉がもつイメージからは少し離れている。どれもネギみたいに太いのである(図33)。

(図 33)

(図 44)

こんなのを相手にしているので、草刈り機のバッテリーは二十分くらいで切れてしまい、その度に充電をしなければならない。とはいえ現場にコンセントなど無いので、私は持参していたソーラー発電用の12Vバッテリーにチャージコントローラー(バッテリーが過充電・過放電になるのを防ぐ機械。本来はソーラーパネルと一緒に接続する)を繋げ、そこに12V→100Vの変換器を挿して100V電源を作って草刈りの充電をした(図34)。いずれはソーラーパネルもここに持ち込んで簡易発電所をつくりたい(その前に、諸々の道具をしまっておくための倉庫が必要だと今回思った。倉庫と発電所を兼ねた小さな小屋をつくるのがいいだろう)。

観察してみると、この敷地には主に二つの勢力がある。一方はセイタカアワダチソウで、もう一方はススキである。そのあいだに時々ヤブカラシが絡まっているが、名前に反してヤブに負けている。ネギみたいに太いのはススキで、ふだん道端で見かけて綺麗だなと思う程度であったこの植物がこんなに力強く存在を誇示するものだとは知らなかった。このしなやかさとみずみずしさ。私は「こわい」と思った。命が溢れてとまらないといった様子で、おそろしかった。

そんな命のパワースポットを村上は、いわば「侵略者村上」として、産業革命の力(草刈り機)を駆使して刈りまくった(図35)。草の間に蜘蛛の巣が張られていたり、ショウリョウバッタやカマキリが逃げ惑ったりしているが、構ってはいられない。ここは心を鬼にして「侵略者村上」に徹しなければ、ことが進まないのだ。人生には、立ち上がらなければならないときがあると、私は何度も心の中で呟いた(とはいえ予定があって立ち上がれないこともあり、そういう時は無理をしなくていい)。

《夏の家　冬の家》計画改め《村上勉強堂》計画に関する報告書 **No.3**

草刈りと夜のおしゃべり、テストピースの制作と土が包む時間について

作成者:村上 慧

2022 年 11 月 12 日

(図 35)

草刈りと夜のおしゃべり、テストピースの制作と土が包む時間について

作成者:村上 慧

2022 年 11 月 12 日

バッテリーを充電しているあいまにホームセンターコメリへ行き、後に必要になる10×10mのブルーシートやコンクリートブロックを二十個ほど買ったりしながら作業を進め、敷地の7割ほどの草刈りが完了した時点で17時の鐘が鳴った。私は汗だくになっていたので、このタイミングで風呂に行くことにした。

あらかじめGoogleマップで「銭湯」と調べ、「クリーンセンター入浴施設」というスポットを発見し、「お気に入り」のピンを打っていた。そこはゴミの焼却施設で、その熱を利用した入浴施設が併設されているようだった。「完全予約制」と書かれていたので、私は車の中から電話をかけた。

「十八時からなら一名あいてます。ただシャンプーとか石鹸とか、そういうものは一切ないのでお持ちください」と、通常の0.75倍速くらいのスピードでのんびり話すおばちゃんの声とやりとりし、ガソリンスタンドで給油してから、唐突に現れた暗い森を抜け、クリーンセンター入浴施設に着いた。

受付のおばちゃんとおじちゃんが非常に親密に話しかけてくれ、私は顔がほころんでしまうほどだった。しかし規定により、県外在住者は入浴料が市内在住者の倍の八百円と、ちょっと高かった。私は名前と性別と住所と電話番号を、短冊みたいな横長の紙に記入した。

「とうきょうと、ですか。そうしたら、八百円ですね。市外なので高くなっちゃいます」

電話で話したおばちゃんよりもさらにのんびりした調子で、受付のおじちゃんが対応してくれた。それだけで風呂に浸かっているような気分であった。

「今後も、ご利用の予定などはありますか？」

「あるかもしれないです」

「では、利用者カードっていうのをね、お作りしますので、終わったらまたここに来てください。それがあれば、これを記入しないですみますので…お仕事か、なにか？」

「ちょっと、こっちで土地を買ったので、これから通うことになると思います」

「そうですか。住所をもし移せるようならね、安いですよ」

おじちゃんは終始ほほえんでいた。

(←ロビーにあった牛乳の自動販売機)

草刈りと夜のおしゃべり、テストピースの制作と土が包む時間について

作成者:村上 慧

2022 年 11 月 12 日

この施設の露天風呂で、私は素晴らしいひとときを過ごすことができた。

露天風呂に入るなりそのおじさんは、「こんばんは」と挨拶してくれた。私が挨拶を返すと、彼はこう言った。

「今日は、お彼岸ですかね？」

そういえばそうだったかもしれないと思ったが自信が持てず、「え、ああ、えっと、もう…」と私がもごもごしていると、

「ああ、中日（ちゅうにち）は昨日か！…いやね、わたし24日は用事があるのでね、今日が中日ですよ」とおじさんは一人合点したようであった。

こちらもおじいさんになったような気持ちだった。というよりも、私はすっかりおじいさんになっていた。75歳くらいのおじいさんになって、湯船に浸かりながら、そうですか、今日は中日ですかと相槌を打っていた。

「おうちで、おはぎなどつくりましたか？」

「もう、なにもやらなくなっちゃいましたねえ」

「ははは。そうですよねえ。わたしもおふくろが生きてた時分はね、中日になるとおはぎを作ってくれたんですよ」

「ほお。やっぱりおはぎですよね」

「そうそう。あれはね、やっぱり、誰かに食べさせたいって思うから作るんでしょうねえ」

「そうかもしれませんねえ」

それからおじさんは「ふう～」と、お風呂の湯加減を堪能するようにため息をついた。

私は「・・あずきを炊くところからやってたんですか？」と聞いてみた。

「いやいや、近頃はね、売ってるじゃないですか。あの、ビニールに入っているものが」

「ああ、そうですね、もうできあいのものがね」

「そうそう、あれ（餡子作り）が一番大変ですからね」

「そうですよね、あれが一番大変ですよねえ、時間かかって」

「あれができてたら、もう半分できたようなもんですからねえ、ははは。簡単になりました」

「そうですね。おはぎ、いいですねえ」

すこしのあいだ沈黙してから、「ふう、、ほお」とまたおじさんはため息をついた。

「おじさん」というよりも、「おとうさん」と呼びたいオーラを讃えている。いわゆる「おじさん」という言葉が持つイメージは、ここ数年でずいぶん貶められてしまったなと私は思った。このひとはゆっくりと自分の話をしてこちらの話をしっかりと聞いてくれる。

それから私たちは明日の天気予報の話をした。予報だと、明日も今日と同じく雨が降ったりやんだりするらしい。私はこのおとうさんを介して天気予報を聞いたのである。

「もうだいぶ涼しくなりましたねえ」

「そうですねえ。暑かったですからねえ」

「やっぱりね、中日をすぎるとね……。秋には、どこか旅行など行かれるんですか？」

そう訊かれ、私はちょっと笑ってしまった。幸せで。幸せとは、こういう時間のことを指すのである。

「いやあ、旅行といえるかわからないけど、10月に、長野県の大町に人の仕事を手伝いにいきますね」

「ああ、信濃大町ね」

「そうそう！」

草刈りと夜のおしゃべり、テストピースの制作と土が包む時間について

作成者:村上 慧

2022 年 11 月 12 日

「信濃大町か。たしかあそこから、アルペンルートを通って、あそこにいけますよね。クロヨンダム」
「そうです！行ったことありますか？」
「ぼくは山が好きでね、何度も行きましたよ。あのへんの山はぜんぶ登りました」
「へえ、そうなんですね。大町は玄関口になってますからね」
「そうそう」
「立山とかものぼったんですか？」
「立山とか、つるぎとか、あのへんを縦走しましたね。北アルプスはね、五回はいきました」
「それは、けっこう好きですね」
「そうですねえ」
「今はもう登らないんですか？」
「いまはもう歳くっちゃったからなあ、それと、心臓麻痺やっちゃってね」
「ああ、そうなんですか。大変でしたね……でも、よかったですね」
「そうそう。だから今はね…。若い時分には友人と何度もいきましたけど」
「そうですか」
「縦走なんでね、ずっと山から降りないんですよ」
「そうですよね。ずっと、登りっぱなしですよね」
「そうそう」
「いいですね」
「大町へは、なにをしに？」
「ちょっと、制作の手伝いといいますか」
「そうですか。それは、展覧会かなにか？」
「そうそう。ちょっとした芸術祭のようなことをやっているみたいです」
「そうなんですねえ。わたし新潟なんですけど、あの、十日町…」
「え、十日町なんですか？」
「いや、わたしは柏崎なんですけどね、十日町のほうでも、やってますよね」
「あ、そうですね。十日町でも、芸術祭やってますね」
「わたしは行ったことないんですけど」
「そうですか。あれと似たような感じですね。規模はずっと、小さいんですけど」
「場所は、会場かなにかを借りて？」
「いや、空き店舗ですかね。商店街の」
「ああ、なるほどねえ」
「そうそう。そういうところを4つくらい借りて、やってるみたいです」
「なるほど」
私は洗い場でもこのおとうさんと隣同士になった。おとうさんは白い固形石鹸をタオルで泡立てて、ふわふわの泡のかたまりみたいになったそれを手に持ち、体をゆっくりと丁寧に、まるで手当てをするかのように洗っていた。私が体を洗い、頭を洗い、顔を洗い、眼鏡を洗って、手ぬぐいで拭きはじめても、おとうさんは体を洗っていた。

《夏の家　冬の家》計画改め《村上勉強堂》計画に関する報告書 **No.3**

草刈りと夜のおしゃべり、テストピースの制作と土が包む時間について

作成者:村上 慧

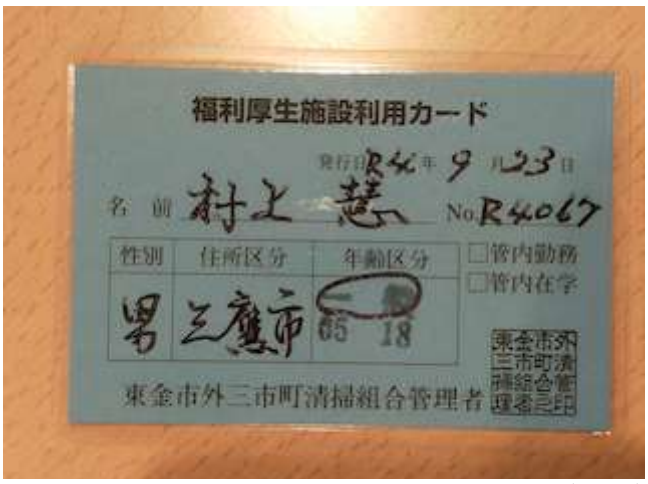
2022 年 11 月 12 日

「お先にしつれいします」と私が出て行こうとしたら、「はい、おやすみなさい」と返してくれた。背中に派手な刺青の入った男性も同じく「へい～」と、挨拶をしてくれた。別府の銭湯みたいだと思った。私の前に洗い場から出て行った人もおやすみなさいと言っていたし、ここでは挨拶が基本なのである。いい。

風呂から上がり、廊下のソファーで靴下を履こうとしたら受付のおばちゃんが小走りでやってきて、「村上さん」と私を呼んだ。

「利用者カードができましたので、次回はこれを見せていただければだいじょうぶですので」

窓口は歩いて数歩のところにあるのに。おばちゃんはわざわざ出来上がったカード(図36)を持ってきてくれたのである。



(図 36)

「月曜日が基本はおやすみなんですけど、祝日だった場合は、その翌日になります。月曜がおやすみです」

私ははっきりと「ありがとうございます」とお礼を言って、施設を出た。

それから暗い森を、窓からの風で髪を乾かしながら晩ごはんを求めて車を走らせた。雨が降ったりやんだりしていた。

晩御飯を求めていた私はすっかり暗くなった山武市内で車を走らせ、「まんまや」という、みるからにうまそうな店の看板を見つけた。おそらくここらでは老舗の、牛かつ定食の店である。店内では60年代くらいのアメリカン・ポップスが流れていた。店のおばちゃんに「やわらかネックかつ定食」をご飯少なめで、と注文したら提供する前に「ご飯はこのくらいでいいかな」と確認してくれた(図37)。

(図 37「やわらかネックかつ定食」税込 1100 円)

とても美味しくて、これからも通うことになるだろうなと確信を持つほどだったのだが、ここでの事件は食後に起こった。

私が「めっちゃおいしかったです！」とおばちゃんと厨房のおじちゃんにお礼を言い、会計をすませて駐車場へ行き、たばこを吸いながら携帯を見ていたら、割烹着姿の「まんまや」のおじちゃんがこっちに向かって歩いてきた。車の前で立ち止まり、会釈をしてきたので、私は窓を開けた。するとすこし高めの声で、そしてとてもやさしい口調で、おじちゃんはこう言った。

「閉店なんで、電気消しちゃうんですけど、いいですか？あの、ここ(を使うの)は大丈夫なんですけど、今日は店をはやく閉めちゃうので、電気消したら、帰れって言ってるみたいで…」

草刈りと夜のおしゃべり、テストピースの制作と土が包む時間について

作成者:村上 慧

2022 年 11 月 12 日

私は瞬間的に目頭が熱くなってしまった。なんという心遣いだろう。しかし私は「いやいや、ぜんぜん大丈夫ですよ！また、きます！」くらいしか言えなかった。もっと言葉を尽くして、いま私は感動していますと、ちゃんと伝えるべきだったのだが…。

おじちゃんは「ありがとうございます」と、店に戻っていった。それから数秒後に看板の電気が消された。

自分の不甲斐なさを悔いながら、しかし心はすっかり暖かい気持ちで、「ヤックスドラッグ」という店へ向かった。翌朝の食糧を調達するためである。私はミネラルウォーターとランチパックのピーナッツ味とウーロン・ハイを買い、店のトイレでこっそりと歯を磨いた。ちなみにランチパックを買ったのは十年ぶりくらいである。昔は好きだったのに、すっかり買わなくなってしまった。ヤックスドラッグはちょっと過剰なほど広くて品揃えも半端ないのだが、客は私だけで、店員も二人しかいなかった。店の公式アプリのインストールを促すアナウンスの声が、昼みたいに明るい店内に響き渡っていた。

現場に戻り、車の後部にマットを敷いて寝床をこしらえた（図38）。すさまじいほどの虫の声がする。いちばん耳に入ってくるのはコオロギの声で、車のすぐ近くに一匹元気なやつがいるらしい。それからスズムシが左右それぞれの少し離れたところに2、3匹いるのがリズミカルに聞こえてくる。なんとも気持ちがよい。そして、そんなコオロギとスズムシをぐるりととりまくように、ちりちりちりちりと間断なく鳴いている大量の虫たちがいる。こちらはなんの虫だかわからない。

後部座席の窓を開け、念のため蚊帳を開いて天井のフチにひっかけ、マットをすっぽりつつんで横になったとき、「現場感」がじわじわとこみ上げてきた。プロジェクトがようやく始まった気がした。ここまで、長かった。

（図 38）

翌24日、起きてコンビニへ行き、トイレで顔を洗って、コーヒーとおくら納豆巻きという、食い合わせの悪そうなものを買って駐車場で食べた。コンビニの前でムスリムらしき青年たちが大勢でたむろい、英語でおしゃべりをしていた。近くにモスクがあることと、その隣には、礼拝のある金曜日の昼間しかオープンしないパキスタン料理屋があることを私はGoogleマップで知っていた。このあたりにムスリムのコミュニティがあることは想像していたが、思っていたよりもその規模は大きいらしい。

それから私は現場に戻り、近所から訝しげな視線が飛んできていないか少し気にしつつ、草刈り作業の続きを行なった。湿度が高いせいか、一瞬でTシャツが汗でびしょ濡れになった。バッテリーは20～30分くらいで切れるが、バッテリー切れという外的な要因で作業が中断されるのは、リズムができてよい。加えて、雨が突然猛烈に降ったかと思えば、急に晴れ間が差したりもして、空がいそがしい。お天気アプリによると洪水注意報も出ているらしい。私は「油断せずいこう」と口に出した。それから、「油断せずいこうって、『テニスの王子様』で誰かが言ってたな」と思った。

草刈りと夜のおしゃべり、テストピースの制作と土が包む時間について

作成者:村上 慧

2022 年 11 月 12 日

バッテリーが切れた隙をついて、刈った草を集めるための熊手を手に入れるためコメリへ行った。ステンレス製のアメリカンレーキと剪定バサミを買った。レーキというものを初めて買ったが、なるほどこういうときにはこういうものが必要だと体感的に理解した。草の量が半端ではないので、熊手では頼りないのである。道具とは、必要があるから発明されるのである。

それにしてもコメリはいい。それほど品揃えが豊富なわけではないのだけど、なんでだろう、あのテーマソングがいいからか、なんとなく好きだ。普段からたまにYoutubeで聞いているので、コッ、コッコッ、コケッコーけっこうですね、コメリ！というあのフレーズが店で流れてくると、ライブ会場に来たような気持ちになる。

現場に戻って作業を再開する。15センチ以上はありそうなカマキリが、草刈り機から必死で逃げていくのを3匹もみた。バッタなどは数が多すぎて、草刈り機に飛ばされた草の破片が飛んでいるのか、バッタが飛んでいるのかわからないほどである。一箇所、枯れ葉が山になっているところ（図39）があり、掘り返すとカブトムシの幼虫が3匹潜んでいた。これはそっとしておいた。バッタやカマキリは狩猟採集者なので、この原っぱを追い出されても生きていけるだろうが、幼虫はここに住んでしまっている。それを追い出すのは、はばかられた。

(図 39)

ここには当然敷地境界があるのだが、そのどこまでを刈ればいいものなのか、わからないという問題が生じた。隣の空き地はともかく、奥はこの土地から隣の住宅の裏側まで地続きになっていて、室外機の上には首輪をした黒猫がまったりと寝そべっていて、草をすっかり刈ってしまったら家の窓が丸見えで、猫もびっくりするのではないかという心配もあり、すこしだけ刈らずに残しておいた。

ひととおり草を刈り終え、この土地を買った時に調べた地球の裏側の南大西洋の海底を思いながら、今度はレーキで刈った草を積み藁みたいにごろごろと丸く集める。全方位からサラウンドで聴こえてくる、草の擦れる音が心地いい。どうやら地球は丸いらしい。ふしぎだ。この裏側には大量の海水が地球に張り付いていると思うと、ほんとうにふしぎだ。

レーキで草を集めていると奥の家から人が出てくるのが見えたので、柵越しに挨拶をした。私と同い歳くらいの、なんとなく親しみのもてそうな青年だった。この土地を買ったこと、美術作品を作る人間であること、ここでは畑をやったり小屋のようなものを自作すること、都内に住んでいて、これから通うことを伝えた。青年は「いま両親がいないんですけど、伝えておきます」と言った。タバコを吸いに外に出てきたようだった。

地表の草が取り除かれると、ようやく土が見えてきた。あんなにたくさんいたクモたちの姿が見えない。どこかに避難したらしい。集めた草を土に埋めるなりしたほうがいいのだろうが、あまりにも量が多くてその気になれず、とりあえず敷地の排水溝側にまとめておく。最後にもう一度草刈機で地面から飛び出している茎を刈り、草刈りが終了した。

草刈りと夜のおしゃべり、テストピースの制作と土が包む時間について

作成者:村上 慧

2022 年 11 月 12 日

それから土を掘った。50センチ以上掘ってアトリエに持ち帰りたいのだが、さきほどからすこし雨が降っているため土は重く、ぐちょぐちょと音を立てるほどで、水を混ぜすぎた粘土みたいになっている。そこを、鍬とスコップで力任せに掘っていく(図30参照)。どこまでいっても植物の根が出てきた。掘っても掘っても、なにかしら細かい繊維状の有機物が埋まっている。そして、掘った穴の底にどんどん水が溜まっていく。雨が降っている影響もあるだろうが、もしかしたらこの土は常に水を含んでいるのではないかという感触もある。だとしたら、井戸の自作が現実味を帯びてくる。

霧雨を浴びながら、60cmほど掘ったところで気力に限界を感じたので、多少有機物が混じってはいるが、この深さの土を持ち帰ることに決めた。庭仕事に使うような緑色のガーデンバッグに、手で持てる最大量の土を入れ、なんとか車に積み、最後に掘った穴にブルーシートを被せ、重しにコンクリートブロックを置いて撤収。私はプール上がりみたいに汗だくになっていた。

10 月 3 日、版築テストピース制作

持ち帰った現地の土で版築のブロックを制作した。厚みはひとまず20cmとした。建築家の遠野さんの話では、仮に厚みが90mmしかなくても版築の性能は発揮されるとのことだったが、直感的に20cmくらいが妥当だろうというのと、事前に買っていたアスファルトタンパー(アスファルトを固めるときに使う、鉄製の叩き棒のようなもの)のサイズが20cm×20cmだったので、それに合わせた。

(以下、図40参照)まず深さ20cm、横21cm、縦21cmの型枠をつくり、7.2kgの現地の土に0.7kgの消石灰を加え、石灰率10%の生地をこねる。持ってきた土はそれなりに水分を含んでいたので、水は霧吹きですこし吹きかける程度にした。以前遠野さんのワークショップに行った際に作った土の感触を思い出しながら、水を加えすぎないように気をつけた。ただ、どうしても土がダマになってしまう。素手で握るようにしてある程度は崩したが、キリがないので多少ダマを残したままでやってみることにした。ダマを完全に無くそうとすると、なんらかの機械が必要そうである(のちに調べたら、「回転式古土分別器」というものがあった。便利なものはすでに発明されているものである)。

出来上がった生地を8cmぶん型枠に入れ、それが5cm程度に沈むまでタンパーで叩く。途中、土が足りなくなったので、新たに3.3kgの土と0.3kgの消石灰を加えた。つまり合計すると、今回使った材料は10.5kgの土と1kgの消石灰、合計11kgもある。たかだか20cmの立方体が、11kgもある。ちなみに『六法全書』(有斐閣版)の重さは約4kg(6600ページ、厚さ15.2cm)である(図41)。

(図 41)

叩いていると、土がどんどん圧縮されていくことが実感できる。ときどきダンパーをあげて土を見ると、その表面の美しさに見惚れてしまう。まるで世界のすべてがここに、超高密度でぱんぱんに詰まっているような、ブラックホールを作っているような気持ちになってくる。

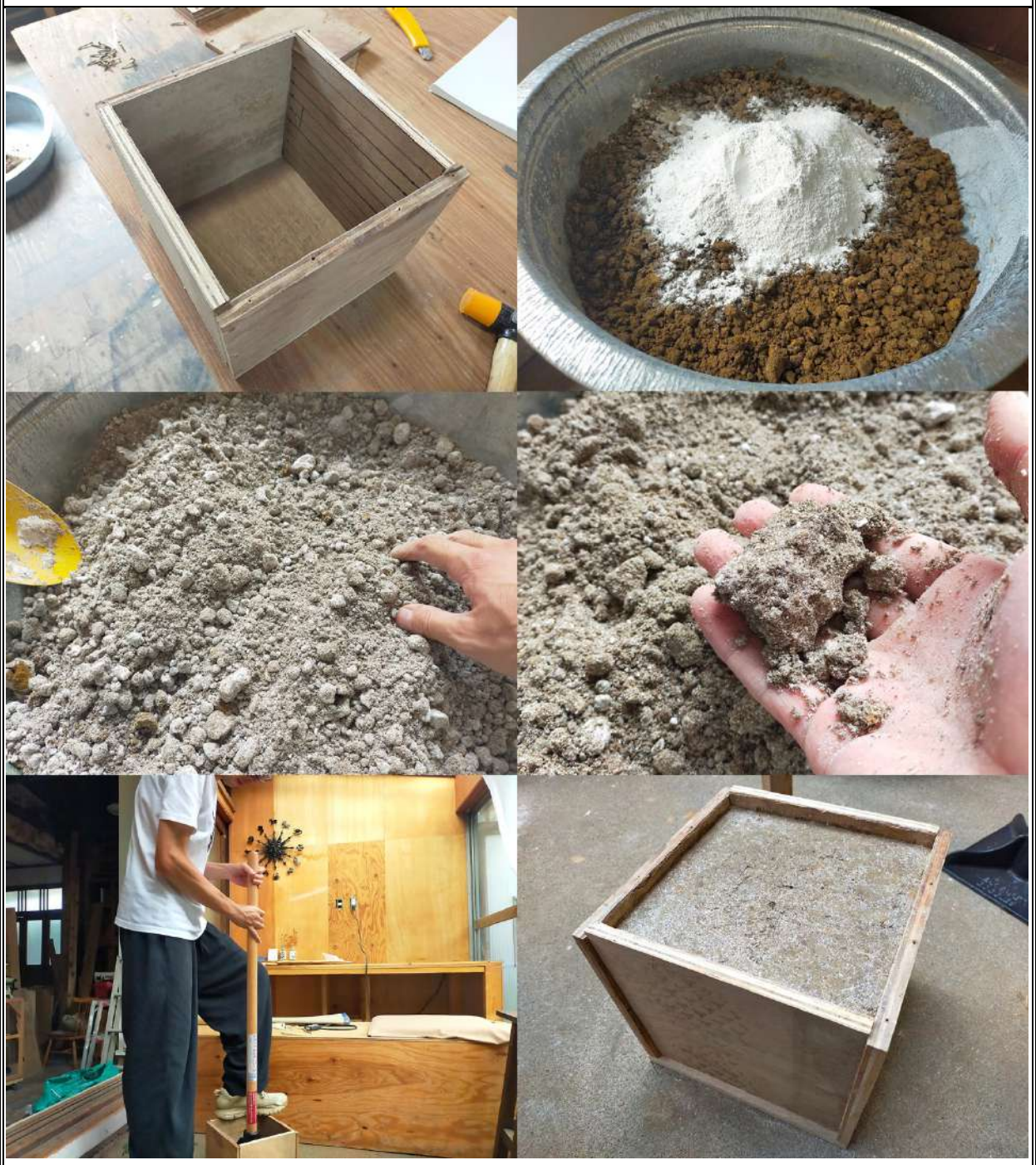
一人では大変だが、ただ土を叩くだけなので人の手を借りやすく、例えば近所の中学校の運動部の人たちにきてもらって、筋トレとして手伝ってもらえるかもしれない、とも思った。とにかく、これを実寸(幅270cm×高さ180cmの壁を3、4回作る必要がある)で作るのは一人では厳しいだろう。どう考えても手伝いが必要である。

《夏の家　冬の家》計画改め《村上勉強堂》計画に関する報告書 **No.3**

草刈りと夜のおしゃべり、テストピースの制作と土が包む時間について

作成者:村上 慧

2022 年 11 月 12 日



(図 40)

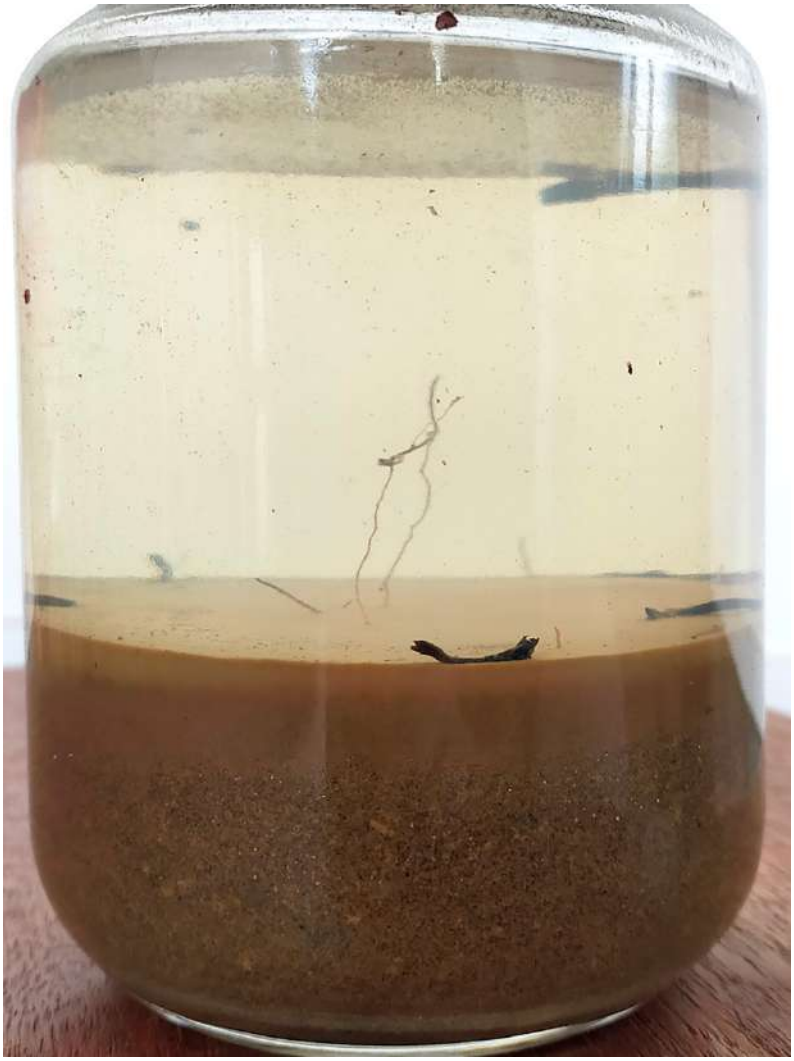
出来上がったテストピースは、数日放置して乾燥を待ってから型枠を外すことになる。本報告執筆時点では未だこの型枠を取り外していないので、その報告はまた次回にまわしたい。

草刈りと夜のおしゃべり、テストピースの制作と土が包む時間について

作成者:村上 慧

2022 年 11 月 12 日

おわりに



（図 42）

本報告はこれで終了であるが、最後に、現地の土で行なった簡単な粒度試験で感じたことを添えておきたい。粒度試験とは、土を構成する土粒子の粒径分布（粒度）を求めるため、水と共に土を瓶に入れ、数日間放置して沈降を待ち、出来上がった層を目視するものである（図 42）。細かい粒子ほど上部に残り、大きなものほど下に沈む。この分布が豊かなほど版築に向いている。

ちなみに建築家の遠野さんにも土のサンプルを送り、「いただいた土、版築に使えると思います。触った感じは粘土分が多そうでしたが、詳しくは粒度試験をしてみないとわからないものの、瓶にいれて様子を見ると 砂分 も入っているようです」とのお返事をもらった。その際ありがたいことに、4種類のテストピースを作ってはどうかという提案もいただき、土に混ぜる消石灰、砂利などの比率の例を提示してくれた。その報告も次回行えればと思っている。

草刈りと夜のおしゃべり、テストピースの制作と土が包む時間について

作成者:村上 慧

2022 年 11 月 12 日

私はこの粒度試験を行い、数日経って瓶を見たとき、その美しさに息を呑んでしまった。ここには、時間が閉じ込められている。46 億年と言われる地球の歴史のなかで、溶岩が生まれ、冷やされて岩となり、岩は砕かれて石となり、砂となり、粘土と言われるまで細かくなり、また、元は貝殻だったもの、落ち葉だったもの、動物の骨だったものたちも分解され、これに加わり、全てが渾然一体となった「土」としていま、ここにある。

ここに現れている粒度の違いは、それが経てきた時間の違いでもある。いまはまだ下の方に沈んでいる大きな粒子たちも、やがては細かく砕かれていき、千年後に世界のどこかで行われる粒度試験では上の方に移動しているかもしれない。そのときにはまた、新たな粒子たちが下部を支えていることだろう。そしてその粒子は、もしかしたらかつての私の体かもしれない。土が包んでいる途方もない時間、日常生活ではあまり感じることない、大いなる循環の一部を見せてもらえたようで、私は思わず手を合わせてしまった。

文責:村上慧